変わる教育委員会

《第604回》

三島村は日本の保健室⑤

鹿児島県・三島村教育委員会
教育長　室之園晃徳

都会と地方を結ぶ山海留学

教育と文化の薫りを

人口わずか400名足らず。財政も日本で最も脆弱。交通、産業、観光の発展も厳しい離島の村。それでも有人国境離島に指定された、島国日本をカタチづくる国土の大切な一部である。このような離島の村や地方の小さな町を守っていくことが、国の発展には絶対に必要だ。

しかし、自主財源も乏しく、ふるさと納税の返礼品もままならない村は、交付税でやりくりするしかない。せっかく島に赴任していただいた先生方の住宅や学校の改修・補修も、要望通りに進まないのが現実である。

中学生によるアフリカの太鼓ジャンベの演奏（県中学校音楽コンクール16年連続金賞）

このように「金がなければ知恵を出せ」しかない現実の中でできること、それはこの村を「教育の島」として進化させることだと考えている。幸いにもこの村にはユネスコ無形文化遺産に登録されるような、貴重な伝統文化や数々の伝説が残されている。さらには日本ジオパークに認定されている豊かな自然。長年取り組んできたアフリカの太鼓ジャンベを通したギニアとの国際交流。「教育と文化の薫り」漂う村づくりは、先人たちから継承した島の品格を高め、村民の誇りを呼び覚ます。

また、現在特に力を入れている遠隔教育システムによる日々のオンライン授業は、魅力ある教育づくりに弾みをつけている。中でも今年5月、天皇皇后両陛下と三島村の子どもたちとのオンラインによる懇談が実現したのは誠に僥倖であった。継続は力となり、続けることが大きな幸運を呼び寄せる。特色ある教育による付加価値が、山海留学の効果をさらに高めていく。

ウィンウィンの関係を築く

本村の山海留学は、県・村の補助があるため実親の負担は少なく、経済的に厳しい家庭の子でも可能だ。何よりも子どもたちは元気に学校に通え、学力も個別指導で確実に向上できる。

一方、人口流出が止まらない町村にとって学校の存続による地域の活性化は、一時的ではなく将来的にも関係人口の確保など多彩な村づくりの展開が期待できる。つまり親と村のウィンウィンの関係を通して、国の教育問題の解決に貢献できるのだ。

決して明るい話だけではない。大なり小なりトラブルも多いが、切実な問題である里親の確保については、多人数の受け入れ可能な寮の取組を始めた。

今後、全国のネットワークづくりを進め、情報を交換・共有して、この制度を充実・発展させていきたい。山海留学の効果がもっと認識され、有効な教育スタイルの一つとして、さらに広がっていくことを期待している。